

GA JAPAN

Global Architecture

ENVIRONMENTAL DESIGN 3-4/2006

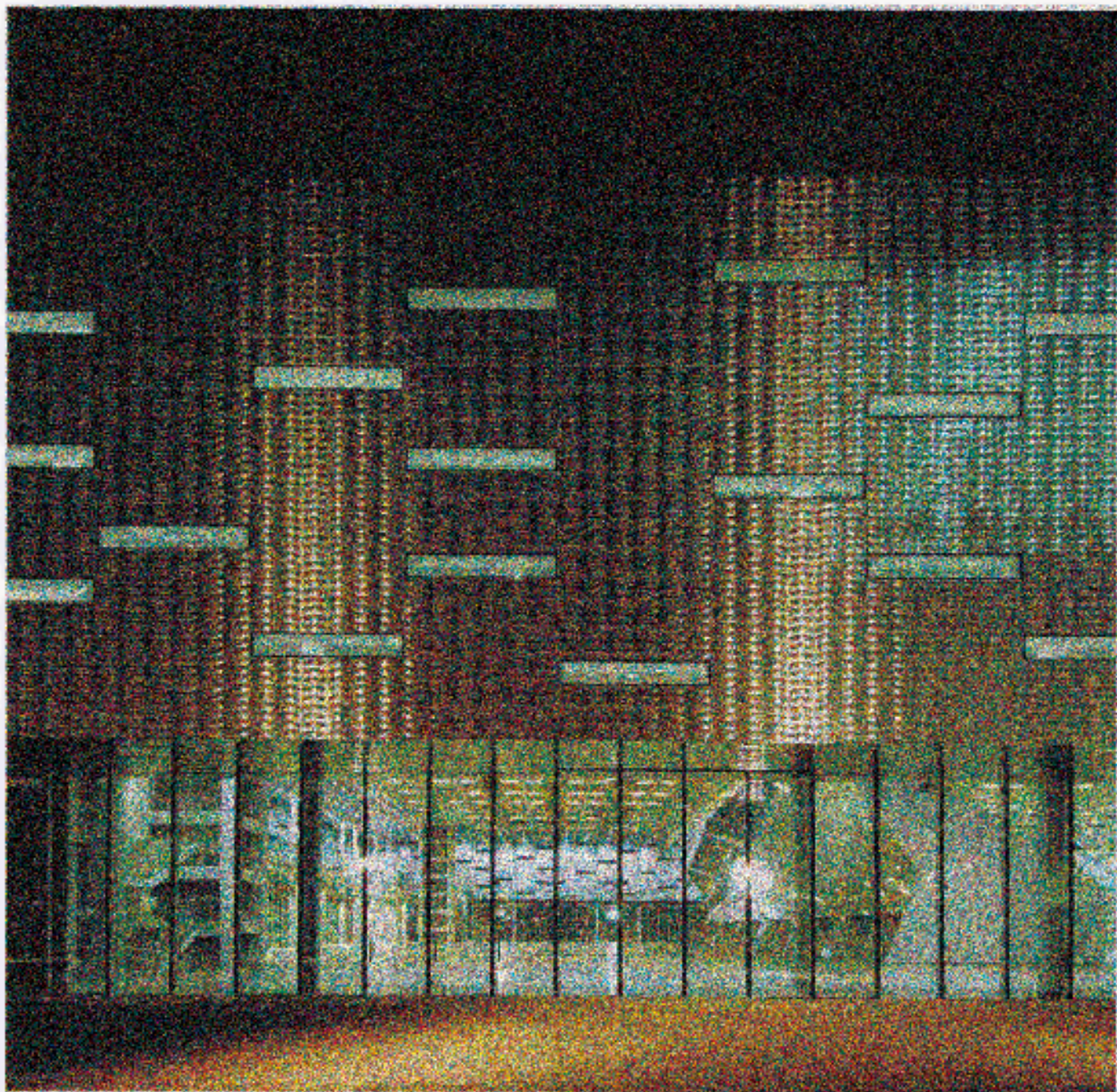
磯崎新/トリノ・パラホッケー 北川原温/シーボン、本社
青木淳/JIN CO., LTD. 中村拓志/lotus beauty salon 阿部仁史/SSM(菅野美術館)

座談会=過去と未来、それぞれの究極へ 藤森照信・妹島和世・西沢立衛・二川幸夫

特集①=建築における日本の中の世界、世界の中の日本2——横文彦、J・ヌヴェル、西沢立衛、伊東豊雄、隈研吾、青木淳、谷口吉生

特集②=コンペに見る建築デザインの潮流 対談=均質さの先に見える不均質さ 伊東豊雄・佐々木睦晴

79



庭×造園×ランドスケープ

三谷康彦

今年のGA JAPANでは、「特集：建築における日本の中の世界、世界の中の日本」と題し、七人の建築家に「庭×ランドスケープ」をテーマをお話を伺いました。

建築ももちろんですが、イメージの具現化のために、特に、庭やランドスケープの場合は、「技術」「ノウハウ」など、基本的な技術の教々がより一層重要となります。そこで、ランドスケープ・アーキテクトの三谷康彦さんに、エクステリアの専門家から見た、日本と海外のランドスケープのお話を伺うことにしました。

三谷さんは徳州大学を卒業後、コンサルタント会社、庭園を専攻して渡米。アメリカのランドスケープ・アーキテクトの資格を得て、東・西海岸まで活躍。ピーター・ウオーカー事務所に所属の後帰国。現在は日建設計ランドスケープ室で設計室長を務めています。日建設計で進行中の物件大部分のエクステリア・デザイン、施工を統括していらっしゃいます。

庭園人、アメリカに渡る

——「庭」＝ランドスケープと言い切ってしまうには抵抗がありますが、「庭」は、日本を代表するランドスケープの二つの形として厳然と存在しています。

三谷さんは「京都通商館」(日建設計・二〇〇五年)の庭を作られましたが、日建設計に入社する前の十六年をアメリカで過ごし、後半七年間はピーター・ウオーカーの事務所に行っていましたよね。そもそもなぜアメリカに渡られたのですか？ 日本で発達した「庭」とは違う、アメリカ的ランドスケープに惹かれたのでしょうか？

三谷 大学卒業後、京都の吉村元男さんが率いる造園のコンサルに三年ほどいて、七〇年方簿の跡地公園などを設計していました。でも実際の空間や、ディテール、石の置きなども分からずに何となく発注図面を見よう見真似で作っている自分がホトホト嫌になってしまった。「やはり日本で造園の基礎を学ぶには庭を学ぶ必要がある」と強く思い、地下足袋を履く決心をしました。

そこで、京都の西にある小島渡

造という伝統的な庭師の店に丁稚で弟子入りし、五年程、日本庭園の施工をしていました。宮内庁所轄の御殿に在る、高さ二〇〜三〇mの松に登って手入れをすることもあるし、料亭の庭をお手入れに行く事もある。大石を積みあげ、ブルドーザーやバックホーを運転し、左官仕事もする。庭師としてできることは全てやっていた。

そんな二〇代の終わり頃、西の老舗造園業者、小島庭園事務所から依頼された仕事で、「鶴ヶ岡八幡宮・源氏池周りの牡丹園」を設計しました。仕事として一区切り付くし、当時としては、ちょっとまとまった設計料も入った。それで、かねがね興味があったマヤやインカのピリミッドを見ようと、ニューヨーク経由で中南米に渡ったのです。

メキシコ、ガテマラ、エルサルバドル等のピリミッドを三ヶ月程かけて一通り見て歩きました。一旦、友人のいるフシントンロウに降り、日本に帰るべく航空券の予約など入れつつ、「一週間ばかりのんびりしていたのです。でも、日本に戻れば、旅に出る以前からしていた非常勤講師や、細々とした造園の仕事が待っている。また、あの生活に戻るのが、とてささかうんざりしていたこともあって、「このまま日本に帰って京都でやるべきか、それとも海外で自分の力を試してみるのが？」と、迷いが出た。

その頃の私は、園に自信がつかず、三〇チヨイ過ぎの舌者にありがちな「オシは何でもできるン」とか、恐いもの無しの状態でしたから、それで落ち着いてしまうのが物足りなかつたんでしょうね(笑)。それに、アメリカ東海岸の色んな庭

を見たけれど、それほど上手だと思えなかつた。大抵、ディテールが無いし大味で切れが悪い。「これならオシの方が巧いんちゃうかな」と思った。

そこで、フシントンロウの郊外で、お金持ちもたくさん住んでいるボトマックのランドスケープ・コントラクターに自分を売り込むことにしたのです。「オシはマスタ―・オブ・ジャパニーズガーデンだ」とか何とか言って「サンブル・ガーデンを造らせろ」と、「コントラクターの敷地の林の中に日本庭園を造った」「日本から来た庭師の印象が強くなるように、半纏を着て、手っ甲・脚絆に腰かけ、一〇枚コバセの地下足袋で、豆絞りの手ぬぐい姿、わざと派手なバフオーマンスで(笑)。

この庭が地元新聞に取り上げられ、テレビにも出たり、随分と評判になりました。それをきっかけに、主に政府関係の、そうそうたる要人連中が顧客となってくれました。彼らはインテリで、日本の文化も良く知っていて、期日家。一年弱で米国の永住権が取れました。必死の受験勉強の末、アメリカのランドスケープ・アーキテクトのライセンスをとり、自分の事務所も立ち上げ、東海岸での仕事を展開していったわけです。

アメリカに渡った当初は、本物の「日本」を売りにしていました。その頃、韓国系や日系人たちが「和風」の庭を作ったり、ガーデンとして芝生を刈ってしまったり。それとは全く違う存在として自らを差別化し、意識的に現代和風をやるつと。「MFA」(国際通商機構)本部の中庭や、当時(リーガン政権)の国務長官ジョージ・シュルツの「フシントン・シ

ジデンス」をはじめ、五つ星の特
等クラスや大金持ちのセネター
(上院下院議員) クラス、閑静し
ベルの住宅など、刺々しい施主の
仕事ができた。一定のインテリジ
エンスを持つ人たちに評価された
のです。

ビーター・ウォーカーの形

三谷 一方、西海岸のランドスケ
ープアーキテクトたちは、その頃、
結構日本に仕事をしにきていまし
た。日本は、バブルの真只中で、
日本国内のランドスケープ事務所
に頼むよりアメリカから連れてき
た「外タシ」に任せた方が、「コス
ト・パフォーマンスはいいし面白
いもの」を提案してくれる、という
評判があったようです。当時、ア
メリカ、特に西海岸の経済状況は
最悪で、P.O.O. (P.O. Offices
Oriented Design) 事務所など、
大手の優秀なランドスケープ事務
所が潰れた程でした。

ビーター・ウォーカーも長野の
「栗山誠造記念館」(山口吉生)の頃
から、機会があれば日本で仕事を
したい、と想っていたようです。
それで、東海岸にいたる私に声が掛
かり、半年ほどはコンサルタント
として東と西をしょっちゅう往復
していました。そのうち「さあ、こ
れはいい仕事だ」といふ事
になったのでしよう、ビートから
オファーがあった。

若干の戸惑いはありつつも、東
海岸の自分の事務所をたたくまで西
海岸のウォーカー事務所に移った
のです。ウォーカー事務所では、
谷口さんの「B.M. 講義」のラン
ドスケープの後始末や「豊田市美
術館庭園」、「丸亀市駅前広場」
(加藤義、谷口吉生)、「推進科学公園

都市」(藤原新)など、日本を含め
て、機軸でのプロジェクトを中心
に担当していました。

——「日本の影響を受けている」
とも言われるウォーカーですが、
三谷さんからご覧になって、彼の
庭のキャラクターはどう見えまし
たか?

三谷 形の上では、ミニマル・ア
ートの影響を色濃く受けていると
思います。ミニマル・アートの世
界では、東洋文化の影響を受けた
アーティストも多く活躍していま
す。ですから、ビート自身が直接
日本の庭を理解して、影響を受け
たというよりは、アートを通して
の間接的な影響と言った方が適切
かもしれません。

彼と一緒に日本に来た時に、銀
閣寺を案内したことがあります。
もちろん、いたく感動している風
でしたが、それは、フォルムや素
材に対してであって、日本の庭の
文化、精神、テイテールが気に入
ったわけではないような気がしま
した。

ただ、「いへり」(見)と書いても、
その後時々と登場する「見え方だ
けがビート流」の世代とは全然違
う。例えば、「竹をグリッドに生
やしたい」とき、最初にグリッド
状に植えたところで、そのままの
形が維持されるはずもなく、遅々
とグチャグチャになってしまふ。
土の中にしっかりとルートバリア
を入れる。竹を生やしたい所だけ
コンクリートのコア抜きをして、
周りには厚くスラブを打つなど、
見えない仕組みをきちんとしなけ
ればいけません。そういうノウハ
ウは大概は私が考えたり、それ以
前からウォーカー事務所がやって
いたノウハウを活用したりして進
めていました。

一昨年、ビートから、「日本で
自分がやった仕事も、そろそろ一
〇年位になるから、北から南まで、
プロジェクトの現状を全て撮影し
て欲しい」という依頼がありました。
た。これにはかなり感心しました
し、ビートを見福しました(笑)。
自分がした仕事に対する事後の力
タの付け方としてもエライですよ
ね。わざわざその為に金を払って
まで現状を確認したいとは、普通
なかなが思えませんが。それで、
カメラマンを連れて全部廻って写
真を撮ってきたのですが、ラッキ
ーにもそれほど大きく崩れていま
せんでした。

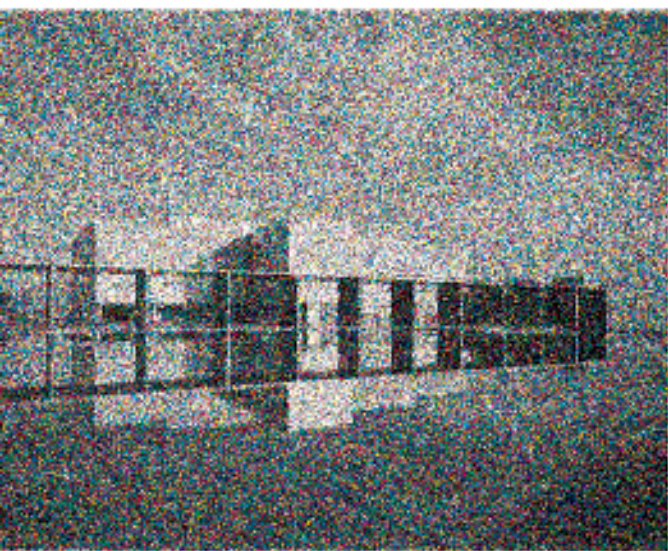
ウォーカーの庭はグラフィ
カルな印象があります。ボキャブ
ラリー、テクスチャーは日本の影
響を受けながら、表現したいエッ
センスは西洋に根ざし、敷地の中
でグラフィックな処理をしてい
る。

三谷 そういふ庭はよく聞きます
ね。彼の、敷地と周辺との馴染ま
せ方を見ると、果樹園が延々と続
くNobun'sの風景の中で育つ
た人間と、日本のように四季感が
豊かな風土で育った人間とでは、
感性も全く違つただろう、とい
う気がします。でも、「庭に必要な
ものってなんだろう、自然とはい
つた何なのか」という根本的な
話になったとき、その敷地の持つ
歴史性、文化性をどうまで庭とい
う一対一の世界に作り込めるか、
という意味では世界共通だと思
います。私がビートの事務所にい
た最後の方、例えば「豊田」の庭園
などは「最初の頃と比べてすいぶ
んと成長したな」と思います(笑)。
ウォーカーは建築家と「ラ
ボレーション」することが多いので
が、周囲と建物の関わり方につ

てはどう考えているんでしょ
うか?

三谷 磯崎さんや谷口さんを始
め、ビートは建築家とよく話をす
る人です。もともと声のデカい、
議論大好き人間で、話し出したら
止まらない。彼の信念と口癖で、
「ランドスケープは自立して存在
出来るものでなければならず、
建築のおまけではない。ランドス
ケープは、建築もそうであるよう
にアートフルでなければならな
い」と彼の論点は非常に明確です。
それが、お互いのデザインプロセ
スの中に組み込まれて、「ラボレ
ーション」された結果として現れ
てきます。

例えば、「豊田」では、「建物を
敷地の街寄りに寄せた方がいい」
という提案をしました。「美術館
は、街に対してバルテノン神殿の



美術館 (谷口吉生、1996年)

ような美しい表情を見せているべきだ」と。

——オブジェである建築物の余りをグラフィックに処理するのはなく、全体的な環境との馴染みや体系的な環境を作るのがランドスケープの役割だと。

三谷 もちろん残念空間にも色々な質があって、使いたいものもない残念空間を作る建築家もいれば、余白自体に意味のある作り方のできる人もいます。ですから、建築家は指を作って、レイアウトをランドスケープ・アーキテクトがする、という考え方も、今や古典的な発想で、もつと境界の無いハイブリッドに入り交じった関係があってもいいのかもしれない。

和風でない迎賓館の庭

——当初、「迎賓館」は「和風迎賓館」と大きな題目が掲げられていましたよね。

三谷 確かに「和風」を強調するように、という依頼でしたが、私は括弧付きの「和風」を作るつもりはなくて、人種や国籍や教養の有る無しに関わらず、人に良いインパクトを与えるにはどうしたらいいかを考えていました。それは多分、全ての人間に共通なものを探すことで、人間の初歩的な感性に訴えるものなのかと。

京都の寺院の庭は仏教伝来による思想を能書きしているような、ある種スタイライズされたものになっています。そうではなくて、飛鳥時代やそれ以前、大きな石を築め、太陽を拝んでいた頃のようないメージのものを作りたいと思った。日本人も、北極に暮らすインuitsも、ネイティブアメリカ

ンも、同じようにやってきた自然との交わりや関わりがある。そういう感性がフックと心に呼び戻されるような場所が、理想なのではないかと思っています。

——ということは、奥の座敷前の巨石はプリミティブな座敷のイメージなんですか？

三谷 そうですね。私自身もすごい時間を掛けて造り上げている重要な部分です。和泉正敏さんは技術的にも精神的にも随分サポートしてくださいましたが、決してデザインの真ことには口出しされませんでした。「三谷さんの好きなようにやったらいいですよ。いくらでも考えたらいいし、気に入らなければ何度でも直します。ここにある石はどれでも使ってもいいですよ」と、一年近くかけて、一緒にじっくり作り上げたものなのです。

——ここでは石の神秘的な「間」を一つのテーマに考えました。実は、腕のある職人になればなるほど、石がざつり噛み合い、完全に一体で、人間の手の跡がくっきり残るような、いかにも「組んである」という作り方をされる。

——ここではそれは違うと考えました。微妙な隙間があって、その奥にまだまだ残っているような余韻があるのが良かった。だから、わざと隙間を空け、石同士がぶつからない組み方をしています。普通なら二つの石を手前と組んだ場合、隙間から向こうの土がこぼれないように、石を合わせるか、あるいは直ぐ後ろに一つ石を配置しますが、わざと隙間を残し、さらにその奥に置いていきます。京都の人はこういう石積みは絶対にしないうし、できません。しかし、隙間を残すようにした方が石の本当の

力が見えるのではないかと考えたわけです。

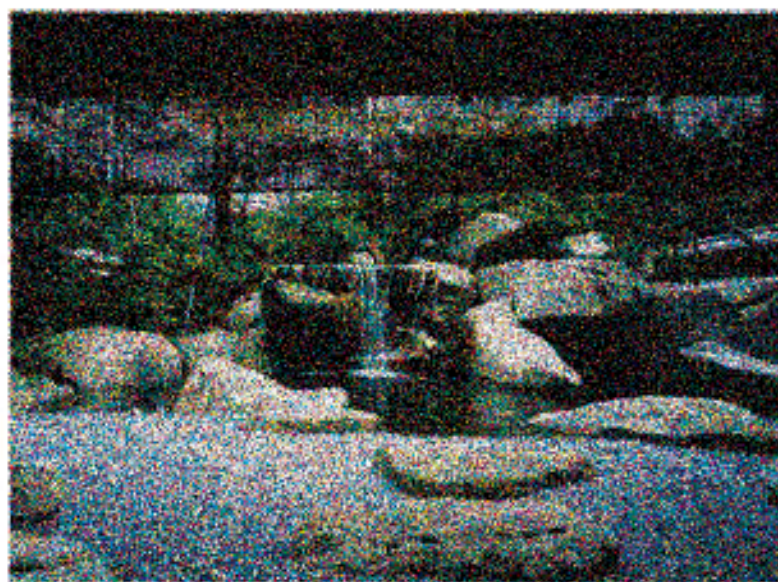
また、「座敷」というと宗教臭くなくなってから、石切場のイメージが近いかもしれません。特に、閉山した石切場は、圧倒的に静かだし、来世でもいろいろか、遡る次元にでも飛んでしまったかのよう……。昔、人が自然と格闘した跡だから、そこでは人間がすごく小さく感じられたり、逆に大きく膨張したように感じられたりする。現代そして未来の座敷のような、あるいは月世界や宇宙のような時間を超越した空間を感じるのです。

水にしても、前に水が落ちるだけの池にはしたくなくて、石からバサツと四方八方に水を落とすように作りたいと思っていました。全てはプリミティブであることが強く意識したからです。

——それに、建築設計のプログラムとしては、南から北に向うにつれて、部屋の作りが段々と繊細になっていきます。繊細な部屋の前に繊細な庭がある、というのは当たり前過ぎます。一番奥の粗雑な部屋の前に位置するこの場所には、「まるで採石場そのもののような巨石の庭を作りましょう」と設計当初から話していました。

——場所柄もあるし、庭を構成している要素や、現れている伝統技法の完成度だけを見ると、「和風」の庭という印象を受けるかもしれません。でも、それが現実化されるまでの大元のイメージには「和風」の形式を表現する意識があったわけでは無いということですね。

三谷 建物の背景には京都御所の緑のウォーリウムが響いています。それを引き込むように、館の



京都迎賓館（日建設計、2005年）

手前内側にも建物の屋根線より高い木を植えよう、という話は設計中にすつとしていました。その植栽によって、御苑まで続くかのような奥行きが生まれるし、屋敷が昔からあったかのような落ち着いた感じが出てくるのです。その発想も、特に「和風」というわけではないし、海外のランドスケープ・アーキテクトでもよく使う手法だと思えます。ここでは仕立てこんだ庭木のマツなどは必要無いし、逆に無いほうが風通しが良くなるのです。

プリミティブなゼスチャー言語にまで立ち返ってみると、それは万国共通で、結局はその場に固有の自然や社会、文化との応答に戻るのだと考えています。



——迎賓館は一つの建物のよう
に見えますけれど、全体を見ると、
各所のキャラクターがはっきりし
ているし、かなりヒエラルキーの
明確な建物ですから、庭としても
その差異を強調するような作り方
をされているようですね。

三谷 確かに、庭でのヒエラルキ
ーは意図的に作っています。少し
ずつ変化が起きている。でも全
体に透切れることなく繋がって
いる。全体の物語は水の輪廻ですが、
「水」や「石」「植物」を媒体とし
て人と自然の関わり方を創ってい
ます。

そこに登場する材料は、時間を
超えていくものだから、名もな
い石工さんが、家族を養うために、
ひたすら根気で彫り上げたような
無垢な美しさが必要なんです。ノ
ミ跡には、芸術家の石の作品のよ
うな、街いや迷いは一切感じられ
なくて、人と自然のかかわりの姿
が見える。ひたすら彫られた美し
さがある。

イサム・ノグチほどの芸術家に
なれば別ですが、石彫を嗜んだ程
度の若い作家が作ったノミ跡とは
全く違う美しさがある。よく見ると
石肌に残る潤いがあるんです。
そういう潤いさを認める日本の
美意識を、海外の人たちにも体験
してもらいたいという気持ちもあ
りました。

人と自然との関わり方、風
土の影響をどう表現するか考える
と、日本だけ、アメリカだけ、と
限定するのはなく、色々な風土
を学ばないと作れないものがある
のかもしれない。

三谷 でもそれを実際に「……の
モノにするには、学ぶだけでは十
分ではありません。設計者と共通
の価値観を持つ職人さんがいるか

が非常に重要です。特にランドス
ケープ設計の世界では、図面で説
明できるところと、そうでない、
その場その場の関係性があるか
らです。

アメリカ仕込みの合理的決め込み

三谷 ウォーカー事務所にいた
頃、図面と特記仕様書で描けるこ
とを全て描ききると、ということ
をやっていました。特記仕様書の記
述の仕方やその内容など、設計者
としてのランドスケープ・アーキ
テクトが完全に掌握する部分で
す。そういうところがちゃんとでき
ないと、「迎賓館」の庭のグレー
ドなんて出来得なかったと思いま
す。契約図書としてきちんと機能
し、品質、物決めまで完全に文書
で示す必要がある。材料も、基本
設計の段階でほとんど全て決定し
ています。決められたの寸法を測
測して、値段までおさえた上で、
特記仕様書を書いている。それに
対してクライアントから要望があ
って、調整をしていく。特に植物
なんて、三年くらい前から検討し
ておくわけですから、長年計画
をかなり綿密に立てておかない
と、絶対うまくいかない。

そういう前さばきの部分をスム
ーズに運ぶことができて初めて、
精度の高い図面による適正な工事
金額となり、後の設計変更にあた
っての重要な工事金額増減の機軸
が設定可能となります。また、職
人さんに時間と手間をかけてもら
う必要がある部分では、とことん
じっくりと納得のいく仕事を仕上
げてもらえるような采配が可能に
なります。

日本では、昔から契約図書など
必要としない、ダンナ家の感性や
好みによるもの作りの世界があっ
たようですが、今や約子定規な書
類がモノを作る世界となりつつあ
る。それではトータルに見て社会
的に良い外部空間など造れない。
最近になって、日本でも、やっと
ランドスケープデザイナーの仲間
うちで、決め込みしていく事の重
要性や、プロセスが仕事の質自体
にも大きく関わってくることを話
し合うようになりました。いくら
形だけ真似てもすぐダメになって
しまいます。また、ランドスケ
ーデザイナーだけでなく施工者
も、後に残らないものを作ってい
けないという意識を、よりシビ
アに持つ必要性を感じています。
——材料が時間の経過と共にど
う変化していくかを考えるのも、
重要ですよ。

三谷 社会のストックになるよう
なものを提案し続けて、やっと社
会にその職能が認められるのがラ
ンドスケープというものだとい
うことでしょうか。こう言ったら、ち
よっと意外かもしれませんが、場
合によっては、PCなどの工場製
品をもっと使ったらいいと思っ
ています。金銭的余裕の無い現場な
どは、ランドスケープで、「建築
材料屋の棚」に残っているような
高価な石をタイヤモンドカッター
で無理矢理薄くスライスして使っ
ても仕方がない。アスファルトだ
って決して悪い素材ではなく、見
切りさえきちんとすれば、
綺麗な素材として使える。ヒコが
入りやすく、補修のしやすい丈夫
な材料ですし、その経年変化も楽
しめます。

三谷 そういう柔軟な態度も必要なの
ではないかと、伺います。「出
もの」にこだわらなければならぬ、
本場に必要なら必要なものを使

っていくのが一番自然で、馴染み
の良いものになっていくのではな
いでしょうか。

——時間の感覚が建築よりも長
いと思いますが。

三谷 それはランドスケープ・ア
ーキテクトとして当然のことだ
です。「迎賓館」にしても、「例え建
物がダメになっても庭は残る」と
いう意識と自信があります。それ
はごく自然なことでしょう。

昨日も青山方面に行ったので
「ランドスケープ青山店」(二〇
〇三年)の外庭の「コケがどうなっ
ているか気になりつつ」「おそろ
く見ない方がいいだろう」と判断
してスルーしてきたところなん
です。庭の技術的なツメがキチンと
されていないがために、空間が豊
かなくなってしまっているのは、プロフェッ
ショナルとしては嫌です。ラン
ドスケープの世界にいる同じ立場
の人間がそういうことをしている
のを見ると少し恥ずかしい。

だから、少なくとも技術的なこ
とで全体がレベルアップしていく
のであれば、私のノウハウをいく
らでも伝えていきたいと思ってい
ます。それをもっと上回る技術を
持っている、という自信がありま
すからね(笑)。日本でランドス
ケープに関わる人間としては、時
間の概念や歴史性、時と共に成長
し変化する変容性などをきちんと
味方に付けた「花鳥風月」の宇宙
観を学び、多くの人に見てもらえ
るものを作ればと思っていま
す。

(聞き手) 本誌・山口眞

文責/本誌・藤原聖子

photos: GA photographers